

一般社団法人日本社会福祉学会 第64回春季大会 報告

第4期全国大会運営委員春季大会担当 都築 光一(東北福祉大学)

大会テーマ：社会福祉学における三浦理論—検証と継承—

開催日時：2016年5月29日(日)13:00~17:00

開催会場：立教大学池袋キャンパス11号館AB01教室(地下1階)

2016年度日本社会福祉学会春季大会は、昨年度学会賞受賞講演として関西福祉大学教授の中村剛会員による講演と、2015年8月に逝去された名誉学会員で元学会長の三浦文夫氏の、我が国における社会福祉研究に対する功績を振り返りつつ、社会福祉制度構築における意義を検証するとともに、今後継承すべき内容を明らかにするものであった。

まず受賞講演において中村会員は、著書「福祉哲学の継承と発展—社会福祉の経験をいま問い直す—」について、社会福祉を根本から問い直す「福祉哲学」が、限られた先駆者によって断片的に行われながら継承されることなく今日に至っている状況のなか、それを継承し、再生し体系化しようとする、意欲的・挑戦的な研究であると述べられた。中でも社会福祉学は、ダーバールとロゴスによって構築されるという仮説に基づき、社会福祉学の体系化に向けた研究が紹介された点は注目される点である。

続くシンポジウムにおいては、三浦理論の社会福祉経営論の理論を構成する主要な要素であるニード論を軸とし、社会福祉政策論、社会福祉計画論、コミュニティ・ケアに関して振り返り、今日に至る理論的意義を確認することとした。コーディネイターを小林良二会員(東京都立大学名誉教授)とし、シンポジストとして社会福祉政策論の立場から坂田周一会員(西九州大学)、社会福祉計画論の立場から和気康太会員(明治学院大学)、コミュニティ・ケアの立場から中野いく子会員(社会福祉研究所)に登壇いただき、コメンテーターとして前学会会長の岩田正美会員(日本女子大学名誉教授)を迎えて開催した。

坂田会員からは、三浦理論がイギリスのティトマスの影響を受け、日本における社会福祉制度構築において運動論的社会福祉政策概念を保持しつつ、行政の内部からわが国の諸課題に関して、理論的にも意欲的に取り組んだ側面の紹介がなされた。続いて和気会員からは、老人保健福祉計画にまつわる当時のエピソード等の紹介がなされ、三浦理論形成当時は「社会福祉計画論」までは理論構築はなされなかったものの、結果として社会福祉分野の計画行政の枠組み形成が図られた点に、大きな役割を果たしたことが紹介された。最後に中野会員からは、コミュニティ・ケアの推進を図るうえで市町村における社会資源の開発整備を進めつつ、必然的に地方分権が推進されていくなかで社会福祉が新たな段階を迎えていくうえで、大きな役割を果たした点が紹介された。

シンポジストの報告を受け、コメンテーターの岩田会員から歴史的意義の大きかったことを認めたいうえで、貨幣区分によるニード論の考え方や社会学者からの社会福祉の権力構造に関する理論的枠組みがないことに関する批判もあったこと等コメントがあり、シンポジストも含めて議論が深められた。

コーディネーターの小林会員からは、三浦理論が我が国の社会福祉制度構築に果たした歴史的役割は大きいとしたうえで、今日の少子高齢化の進行による社会構造の変化は、三浦理論の想定を超えたものもあり、歴史的役割を終えた部分もある中で、今日の社会福祉理論のあり方について、三浦理論の功績からあるいは捨象された様々な要素を読み取りこれからの社会福祉学研究に引継ぎ一層発展させて、今後の人口減少時代を乗り切る社会福祉のあり方を求めていくことを確認してシンポジウムを終えた。

最後に黒木副会長から、閉会の挨拶がなされて閉会した。